

## 親子で感じる「戦争」「平和」「命」「家族」の大切さ ～ 親とともにすすめた平和学習のとりくみ ～

阿山中学校の沖縄修学旅行の現状と目的

今回の修学旅行や「親とともに考える平和学習」でのこだわり

4月25日 ・ ビデオ「命どう宝」視聴

ビデオ「命どう宝」を視聴して(感想や思い)

4月29日 ・ 授業参観での親子沖縄学習

5月7日 ・ 「島唄」誕生秘話・本当の意味 ～

5月10日 ・ 「ゲルニカ」と「沖縄戦の図」

5月17日 ・ 「三線教室」とかりゆし58が歌う「アンマー」

修学旅行の当日の様子 (5月22日～24日)

親子で考えた沖縄平和学習の発信

(6月21日・校内人権集会, 8月6日・平和を考える集い)

三重県教職員組合

橋本 浩信 (はしもと ひろのぶ)

伊賀市立阿山中学校

## 第 63 次教育研究三重県集会 18 平和教育

### 今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次教研では三重大学の吉井美知子さんと尾鷲小学校の谷良純さんを助言者に迎えて、以下のようにそれぞれの報告書を中心に討議の柱にそって討議を深めた。

#### (1) 学校行事や授業を通じた平和学習

尾鷲小学校からは、戦争体験の聞き取りとともに 1944 年 12 月 7 日の東南海地震（津波）の聞き取りを続けていることが報告された。江戸時代の津波体験を伝える「さんがいぼんれいのひ三界万霊之碑」という碑文の前で 1944 年の東南海地震と津波体験を地域の方から聞くというとりくみを続け、6 年生を送る会で、6 年生の子たちが学んだことを劇にして下級生に伝え続けているという学校全体で継続している平和学習の報告であった。外城田小の上紺屋さんの報告は、自身が沖縄の座間味島で集団自決の証言を聞き取ったことをもとに作成した自作絵本「ちゅら美ら島ぬ思い」を 6 年生の子たちに読み聞かせて考えさせる実践であった。自ら聞き取ったことを自作絵本に創り上げた熱意に感心する声が多く出された。子どもたちの感想・考えを深めるためにはどうしたらよいかということ意見が交換された。戦争全体の中に沖縄戦がどう位置づけられるのかを学び、「集団自決」のような悲劇が繰り返されないためにはどうしていけばよいか考えさせていくことが必要ではないかということが話しあわれた。阿山中の橋本さんからは沖縄修学旅行に向けて、美術で「ゲルニカ」「沖縄戦の図」の鑑賞・「三線」「アンマー」などの音楽の面からの沖縄学習、親子で沖縄学習にとりくみいっしょに千羽鶴を折る活動・修学旅行先で「家族からの手紙」を読み、平和の大切さ、家族の大切さを感じさせる活動など、家庭とも連携し全校体制でとりくんだ修学旅行の実践が報告された。自分たちの曾祖父・祖父の戦争体験を知り家族の命のつながりということに改めて感謝し、親子関係を築き直すきっかけとなっていた子どもたちの姿も報告された感動的な実践であった。名張西高からも「人権平和学習の取り組みについて」沖縄修学旅行の実践が報告された。中学校でとりくむ「沖縄修学旅行」と高校でとりくむ「沖縄修学旅行」の実践の違いなど討議できると有意義であったと思うが、残念ながら日程の関係でレポーターが参加できず論議することができなかった。亀山東小の米川さんからは「亀山列車銃撃事件」について学んだ 6 年生社会科の実践が報告された。1945 年 8 月 2 日、列車に乗車していた一般の乗客（非戦闘員）が米軍機による機銃掃射で母親に背負われた乳児を含め多数（14～40 人、実数不詳）犠牲になった事件である。討議では戦争全体の中で、この事件はどのように位置づけられるのかということ把握させて考えさせることが必要ではないかという指摘がされた。亀山支部で継続してとりくまれている地域の戦史の教材化であり、その継続する地域全体の熱意に敬意を表したい。光陵中の松田さんからは、中学 3 年の社会科で「軍票」を提示して太平洋戦争における日本の植民地支配について考えさせた実践が報告された。軍票は慰安婦への支払いとしても使われたり、日本の敗戦後、軍票は現地貨幣に換金されていないため訴訟も起こされたりしているなど、追究していけば奥の深い教材であることが確認された。1 時間の授業記録が詳細に報告され子どもたちが考えを深めていく過程がよくわかった。

#### (2) 地域教材をいかした平和学習

神戸幼小分会の萩野さんからは、4人の鈴鹿市内在住の78～85才の方々の戦争体験をDVDに収録し今後も継続して教材として活用できるようにしていったとりくみが報告された。そのDVDを活用し、4年国語「聞き取りのメモの工夫」の単元の学習にとりくまれた。戦争体験を語る方々の証言が貴重になっていくなか、DVDに収録するという神戸幼小のとりくみはたいへん示唆に富むものである。助言者から、DVDとともに戦争体験者の直筆原稿もたいへん貴重であり、残し伝えていきたいものであるという指摘があった。進修小の森嶋さんは5年生の総合学習で「伊勢空襲体験の聞き取りから日本国憲法の学習へ」としてとりくんだ実践が報告された。「いせ9条の会」の方に紙芝居を見せていただき、戦争を体験し「日本国憲法という宝物」ができたということ学んだ。その後、地域の墓地、慰霊碑を見学し、戦死者の数や、いつ、どこで、何才で、何という人が戦死されたかを確かめていった。6年では杉原千畝の学習をしたいということが語られた。討議では伊勢で自由民権期から戦後まで活躍した尾崎行雄について学ぶことも有意義ではないかという意見も出された。中部西小の内山さんは、6年国語「平和のとりでをきずく」の学習で①戦争と平和について自分の意見文を書く。②その後、地域の老人会の方（20人で10グループを編成）のお話を、6年生48人（約5人ずつ10グループ）で聞き取る。③この聞き取り活動の際には保護者にも参加していただき、3世代で交流する。④子どもたちが書いた意見文を老人会のみなさんにも聞いていただく。考える・聞く・伝える・交流するという活動が学校全体で継続して続けられている。今後も継続してとりくんでほしい実践であり他の地域にも広げていきたい活動である。

## 成果と今後の課題

直接、体験談を聞いたりして「感じる」ということ、複製品でも戦時中のビラや軍票などの「実物」に触れさせ子どもたちを引きつけ考えさせること、体験談をDVD化したり直筆の体験文を残していくことなどの重要性が確認された。また、保護者と連携して平和学習を進めることの意義も確認された。そして、地域に残された物や体験談が、戦争全体の中で、どういう位置づけになっているのかということ我々も把握したうえで、子どもたちにも考えさせることで、より深い学習ができるということ助言者から指摘された。

第63次県教研 司会者 早川 寛司

## 阿山中学校の沖縄修学旅行の現状と目的

- ・一九九七年に三重県で初めての沖縄修学旅行を柘植中学校(現伊賀市立)がおこなったことをはじめとして、伊賀市では阿山中学校を含め数校が沖縄修学旅行をおこなっている。
- ・遠い感覚になりがちな戦争を、同年代の生徒が経験した日本で唯一の地上戦である沖縄戦や、自分やひとを愛する思いにあふれた現在の沖縄を感じ、自分たちの生き方につなげる。
- ・本年度は、「親とともに考える平和学習」で「平和」「命」「家族」「感謝」を実感する。

## 今回の修学旅行や「親とともに考える平和学習」でのこだわり

- ・家庭訪問で、沖縄修学旅行で生徒にサプライズでわたす親からの手紙を依頼する。
- ・子どもの学びを、保護者とも共有し、親子で考え、実感する平和学習にする。
- ・学年通信で平和学習の様子を細かく伝え、親子でいっしょに考える。
- ・生徒がよく知っている沖縄にちなんだ歌やビデオ教材をたくさんつかう。
- ・知識を得るだけの平和学習に終わらず、生徒、保護者ともに「命」「家族」の大切さや感謝の思いを強め、「平和」の大切さを実感し、それをあらわせるようになる。

## 4月25日・ビデオ「命どう宝」視聴

「命どう宝」は一九九七年、柘植中学校が三重県で初めて実施した沖縄修学旅行の様子を三重テレビ放送がドキュメント番組にしたもので、沖縄方言で「命こそ宝」という意味である。戦争体験者から語られる思い、修学旅行で実際に見聞きした中学生の思いがビデオでたくさん語られている。元ひめゆり学徒隊の方が最後に生徒に伝えていたのは「命どう宝」ということだった。生徒たちとどんな思いを持って修学旅行をつくっていくのかを確認した。

## ビデオ「命どう宝」を視聴して(感想や思い)

- ・ひめゆり平和祈念資料館でのひめゆり学徒隊の写真は、誰も笑っていないと言っていたけど、ほんとうにその通りだった。笑う気力もなくなるのかと思った。
- ・「命どう宝」を見て、沖縄修学旅行で学ばなくてはいけないことがよくわかりました。きっと、沖縄にいかないと分からないこともあると思うから、ちゃんと見てきたいです。
- ・昔はお国のため、今は苦しさから逃げるために死んでいく人がいる。みんな生きる勇気をもってほしい。ひとの痛みを理解し、ひとによりそう人間に私はなりたい。
- ・沖縄戦では、私たちと同じくらい年齢の子が病院の手伝いをしたり、死んでいったと思うと怖い。今、自殺とかいろいろある。今の自分の命を大切に生きていたいと思います。
- ・命は他の何にも変えることのできない自分の宝だとこのビデオを見て学びました。沖縄の楽しさの裏には悲しいことがあるということがわかりました。二度と同じあやまちをくり返さないように沖縄での修学旅行で学び、この修学旅行を意味のあるものにしたいです。
- ・ガマの中はあんなに暗いものだと思っていませんでした。ガマの中では、親が自分の子どもを殺したり、自決があったことを知りました。私なら、親に殺されるなんて絶対に嫌です。逆に私が親や身内の人を殺すなんて絶対にできません。自分のかわいいわが子や、大切な親を殺す瞬間、どんなことを思ったのでしょうか。

#### 4月29日 ・ 授業参観での親子沖縄学習

2007年8月9日放送の日本テレビ「NEWS ZERO」で放送されたくらはらレポート「あの戦争を知る 祖父が初めて語る沖縄戦」を親子で視聴した。「NEWS ZERO」キャスター(当時)の知花くらはらさんの祖父が生まれ育った慶良間諸島でアメリカ軍上陸当時の話を孫のくらはらさんに初めて語っていた。姉と自決しようとして首を絞めたが死にきれずにいたとき、おばさんの一言で正気に戻り、死ぬのをやめたこと、そのときに死んでいたら孫のくらはらさんもおいかなかったことが語られていた。このビデオを視聴したあと、修学旅行実行委員の司会で班で思いや感じたことを交流し、さいごに保護者の方と修学旅行当日に糸数アブチラガマでささげる千羽鶴を折った。

##### くらはらレポート「あの戦争を知る 祖父が初めて語る沖縄戦」の生徒感想

- ・「何度も何度も死のうとしていたのに、たった一言で正気に戻った」ときいて、やっぱり声かけて必要なんだと思った。
- ・自決をした人の中には、生まれたばかりの赤ちゃんがいたことにびっくりした。くらはらさんのおじいさんの本当は話したくないが、もうこんな戦争はあってほしくないという思いがすぐ伝わってきました。命を大切にしたい。生んでくれた親にも感謝したい。
- ・くらはらさんのおじいさんが「今、自分が生きていて申しわけない。でもおじいさんがいなかったら、くらはらもいなかったのかもな」と言っていて、やっぱり親がいるから今の自分がいるので感謝の気持ちは忘れてはいけなそう思いました。
- ・くらはらさんのおじいさんは死のうとしたけど、生きていてくれたから、くらはらさんがいるし、あのとき、そのまま死んでしまっていたら、くらはらさんもおいかなかった。私がいるのはお母さんとお父さんが生きていてくれたからで、それもおじいちゃんとおばあちゃんが生きていてくれたからだ。おうちの方や、祖先にも感謝したいと思いました。
- ・小さい島にたくさんの米兵が乗り込んできたときのイメージをしてみると、本当に怖いです。逃げる場所も小さい島だから少ないと思うし、何より生き残った自分が死んだ人に申し訳ないと謝るおじいさんが印象に残りました。ぼくのひいばあちゃんも戦争を体験していて、子どもが多く、逃げるのにとても苦労したそうです。自分の家の前の山の向こう側が真っ赤に染まり、機関銃でねらわれたこともあったそうです。自分が逃げるすぐ横を射撃されたたまが通ったと想像すると、とても耐えられません。

##### くらはらレポート「あの戦争を知る 祖父が初めて語る沖縄戦」の保護者感想

- ・おばあさんの「みんな生きているよ」という声に正気に戻ったとありました。血のかよった親と子であっても声に出して、思ったことや感じたこと、悩んでいることなどを言ってくれないとわかりません。だから伝えて下さい。ともに悩み、考え、そして守りたいと思っています。命を大切に。「生きる」ということには意味があると思います。
- ・同じ日本なのに現在でも沖縄はたいへんな犠牲をしいられていると感じています。日本国憲法にかかげる基本的人権であるのだろうか、深く悲しい気持ちになります。私の祖父は、戦争経験者でビルマで捕虜になりました。最後まで生きて日本に帰るということにこだわったひとでした。私は、そういう祖父を誇りに思っています。
- ・いつもの授業参観と違って、修学旅行実行委員さんを中心にすすめられた授業を拝見させていただき、私自身、知らなかった沖縄戦のこと、真実をこれから若い世代に伝えていかな

ければいけないことをいっしょに学習できてよかったです。きっと、このような事前学習を通して、子どもたちは平和や命の大切さについてしっかり考えることができたと思います。この思いを胸に修学旅行で実際に自分の目で見て、話をきいて、これからの人生にいかしてほしいと願っています。何年かぶりに折った千羽鶴でした。

- ・沖縄には、当時敵国であった米軍の基地がいくつもあり、アメリカ兵による事件も多発しています。沖縄は本土から遠く、その痛みや苦しみはテレビでしか伝わってきません。街の中心にある米軍基地の異様な光景と爆音を感じてきてください。大きな傷を負ったまま、いまだいえないままでいる沖縄の問題にどう向きあうべきか、むずかしいけど、少しでも考えてみてください。ひとまわり大きくなって元気に帰ってきてください。

参加したAの保護者から、知花くららさんの祖父の体験ビデオを見て、下の感想を寄せていただいた。

知花くららさんの祖父が戦争のことを思い出すから生まれ育った故郷へ帰りたくないと言っていたのがショックでした。懐かしいはずの故郷なのに、悲しいことです。

私の父方の祖父Bも沖縄で戦死していると聞き、家族で（子どもが生まれる前に）沖縄へ行き、平和の礎に行きました。祖父の名前が刻まれているのを見つけたとき、父はもちろん、私たちも胸が熱くなりました。まだ小さい子どもたちを残し、どんな想いで亡くなったんだろうと思うと、今、子どもと過ごせる当たり前の生活がとてもありがたいものなんだと感じます。命を奪われる恐怖なんて体験したことがないから、どんな想いでくらししていたか、闘っていたか、亡くなっていったのかなんて気持ちは完全には理解できないと思いますが、少しでもその時代に生きた方たちの思いを感じてくれたらいいと思います。

修学旅行1日目に沖縄県平和祈念資料館に行き、沖縄戦体験者の吉嶺全一さんよりお話をうかがったあと、みんなで平和の礎に行く。みんなでAの曾祖父Bの名前を確認し、曾祖父がいてくれたから命が受け継がれてAがこの世に存在することに感謝するとともに、3年生みんなが自分の祖先へ思いをはせて、祖先や命への感謝を感じてくるという思いを強くした。

## 5月7日 ・ 「島唄」誕生秘話・本当の意味 ～

The BOOMの宮沢和史さんが、「島唄」について「NEWS ZERO」で語っているビデオを見た。宮沢さんは取材で訪れた沖縄で沖縄戦の爪痕を見聞きして、何も知らなかった自分を恥じ、知らない人に伝えていかないといけないと思い、戦争で生き残った人たちに聞いてもらいたい、亡くなった人の魂を空に解放したいと思い「島唄」をつくった。

・私は戦争のことを伝えるのは戦争を体験した人しかできないのかと思っていたけど、オランダでは戦争を知らない若い人たちが伝えていっているということにおどろきました。宮沢さんやオランダの人たちの行動力や、戦争のことを伝えたいという気持ちがすごい。

・元ひめゆり学徒隊の宮城さんが、「自決で亡くなった人も、『これからの日本は二度と戦争をしない』ということを知ったら、喜んでくれると思う」と言っていて、それを裏切らないように、二度と戦争をしない日本であってほしいと思った。

・ひめゆり学徒隊の、まだぼくと同じくらいの歳の女の人たちが集団自決して、そこで生き残った人がこの戦争をもう二度としないように、伝えていこうということがよくわかった。

次に伝えていくのは戦争を体験した人たちじゃなくて、ぼくたち、今から生きていくものが伝えていかなければいけないと思った。

- ・ひめゆり学徒隊の人の校章が映像でうつっていて、白色や赤色が残っていた。沖縄戦は遠い昔のようだが、近いことなんだと思った。「命を大事にする、その原点は戦争をしないこと」と言っていた。戦争のことをよく知って、次の世代に伝えていきたいと思った。もう二度と戦争を起こしたくありません！

## 5月10日 ・ 「ゲルニカ」と「沖縄戦の図」

修学旅行にむけて、美術の授業では、戦争をテーマに描かれたピカソの「ゲルニカ」を見ながら、「何が描かれているか」「なぜモノトーンなのか」「どんな内容がすごいと思うか」をグループで話しあい、発表していった。その後、実際に「ゲルニカ」が描かれた経緯や、込められた思いを確認していった。修学旅行で行く佐喜真美術館には「沖縄戦の図」（丸木位里さん・丸木俊さん 作）が展示されている。授業では「ゲルニカ」をもとに、修学旅行で見る「沖縄戦の図」をどのように見てきたらよいか、何を感じてきたいかなどを確認していった。

## 5月17日・「三線教室」とかりゆし58が歌う「アンマー」

修学旅行実行委員が昼休み等を利用して練習してきたことをもとに「三線教室」をおこなった。3つの弦のそれぞれの音階の説明をおこない、実行委員が模範演奏をした。各クラス5本（各班に1本）の三線を配り、実行委員の指導のもと、みんなが交代で三線を弾いた。最後に、「島唄」のワンフレーズを実行委員で演奏し、各クラスに5本の三線を設置した。

そのあと教員が沖縄出身のバンド「かりゆし58」の「アンマー」がつけられた経過や込められた思いの説明にからめて、自分が家の人に対して悪態をつけていた過去のこと、それを反省するきっかけになった祖母の優しさや思いやりなどを語った。「アンマー」は、ボーカルの前川さんが母への感謝の気持ちをつづった歌である。母とくらす前川さんは、夜遅くまで働く母をよそ目に遊び回り、悪さばかりを繰り返して母に迷惑ばかりかけていた。やがてインディーズからCDを出すようになったが全く売れず、次のCDがダメなら契約が打ち切られるということになった。「なぜ母親は、こんな自分のことをかわらず愛してくれたんだろう」という思いがこみ上げ、自分の人生の半分くらいかけて育ててくれた息子は、まちがいじゃなかったと伝えるため、今までのかっこつけていた自分をかなぐり捨てて、ストレートに感謝の気持ちをつづった歌「アンマー」をつくった。この歌を知っている人は多かったが、深く歌詞の意味を知り、少しだけ素直になれたような、優しい空気が流れた。

## 修学旅行の当日の様子（5月22日～24日）

**ひめゆり平和祈念資料館** バスガイドさんから、ひめゆり学徒隊のたどった足跡や当時の様子の説明をうけ、ひめゆりの塔の前で手をあわせて入館した。修学旅行の課題の1つは、戦争体験証言を書き写してくることで、第4展示室に置かれている作文集を書き写し、飾られているひめゆり学徒隊の顔写真を見て、当時の様子や思いをしっかりと受け止めた。

**沖縄県平和祈念資料館** まず会議室に入り、13歳の時に沖縄戦を経験した吉嶺全一さんから、

学童疎開で乗る予定だが乗れなかった船がアメリカによって沈められ多くの子どもが亡くなった対馬丸だったこと、米軍が上陸してきて、弾雨の中を南部に逃げ、組織的戦闘が終結したとされる6月23日直後に沖縄戦終結の地の摩文仁の海岸で米軍に収容されるまでに体験したこと等の話を聞いた。「平和の火」「平和の礎」についての説明のあと、「平和の礎」の三重県出身者のゾーンで、Aさんの曾祖父Bさんの名前を確認した。戦争体験講話をしていただいた吉嶺さんが、事前にお名前が刻まれている場所を確認し、地図まで用意してくれていた。

**糸数アブチラガマ** 概要説明をきいたあと、ガマの中に入った。当時使用されていたものが当時のまま残されていた。一番奥のところでは、当時、重症患者が毒を渡され、置き去りにされたりもした。その場所で、全員で懐中電灯を消しました。本当に真っ暗で、数秒だけでも怖さを感じた生徒もいた。ガマを出たところで実行委員が代表で今までの学習で感じたことや、これからの自分たちの決意を述べ、千羽鶴をたむけました。

**ホテルJALシティ那覇** 夕食後に、生徒には内緒にしていた「家族からの手紙」を担当から渡した。手紙を読みながら、何度も読み返す人、そっと涙をぬぐう人、みんないい表情をしていた。そのあと、一人ひとりが手紙の返事を書いた。真剣に手紙に向きあう姿、そして、家族と向きあう姿。とても素敵な時間が流れていった。書き終わった手紙はシーサーの切手をはり、封をした。修学旅行1日目は、「平和の大切さ」「命の大切さ」「なかまの大切さ」「家族の大切さ」「感謝」をいっぱい感じる事ができた。

**佐喜真美術館** 「沖縄戦の図」の前で、この絵に込められた思いの説明をきいた。集団自決とは、いわば手を下さない虐殺なのだという作者の思いを感じてきた。そのあと、普天間基地をはじめとする基地についてお話をきいた。戦争が終わっても、沖縄が背負う状況についてや沖縄の人の叫びを、代表してきかせていただいたような体験となった。

**道の駅かでな** 展望台からは、天候の影響か、爆音とともに離陸する戦闘機は見られなかった。でも、本当はこの日のように戦闘機が離発着しない日が来ることが実現されれば、騒音や墜落の恐怖から解放されるということも考えさせられた。

**むら咲むら** 事前に希望した7つのコースに分かれて文化体験を楽しんだ。

**てんぶす那覇でエイサー体験** 松島青年会のみなさんが最初に数曲のエイサーを披露し、模範演技をしながらエイサーを指導していただいた。

**首里城** 琉球王国時代と、沖縄戦当時の首里の様子について考えてきた。それぞれの門や壁、時代背景などを詳しく説明していただいた。

**国際通り** 班別自由行動で、昼食も班毎に好きなものを食べた。たくさんのお土産物をかかえて、戻ってきた。沖縄の人のあたたかさも感じてきた。

## 親子で考えた沖縄平和学習の発信

### (6月21日・校内人権集会, 8月6日・平和を考える集い)

6月21日実施の阿山中学校全校人権集会で3年生が感じた「平和」「なかま」「命」「家族」について1,2年生に発信した。夏には、8月6日に伊賀市でおこなわれた「平和を考える集い8・6」(三重県教職員組合伊賀支部主催、伊賀市教育委員会・伊賀市PTA連合会共催)で、18人の生徒がステージから発信した。生徒の家族もたくさん見に来ていた。沖縄修学旅行を

機会に、親子で平和について考えてきた。平和学習をすすめるなかで、命、家族の大切さを実感し素直に感謝の気持ちをあらわす姿がたくさんあった。沖縄修学旅行と「家族からの手紙」をいっしょにすることで、相乗効果がうまれた平和学習になった。

## 「平和を考える集い8・6」 生徒たちの発信原稿

修学旅行1日目、沖縄に着いた私たちは、ひめゆり平和祈念資料館に向かいました。ひめゆりの塔の後ろには戦争のとき病院として使われた壕、「第三外科壕」があり、そこで、ひめゆり学徒隊の人たちは働いていたそうです。ひめゆり平和祈念資料館にはひめゆり学徒隊全員の写真と名前・年齢などが書かれていました。私たちと同じぐらいの女の子たちが真っ暗な壕の中で負傷兵たちの看護の仕事をし、戦争の中で追い詰められて自決していったことなどを学びました。生存者の手記には、今では考えられないむごいことを私たちと同じぐらいの歳の子がさせられていたことが書かれていました。本当はやりたくなかったらうし、普通に学校へ行って勉強したかっただらうなと思いました。そして、私にはあんなことができるのだからかと考えると、とても怖くなりました。

次に、沖縄県平和祈念資料館に行きました。そこには大きな不発弾、つまり、沖縄戦で爆発しないまま残っていていつ爆発するかもわからない爆弾がありました。沖縄じゅうに今も多くの不発弾が埋まっているそうです。そんな中で生活するのは怖いし、安心できません。今でもまだ戦争が続いているように感じました。さらに、そこで沖縄戦体験者の吉嶺全一さんにお話を聞かせて頂きました。吉嶺さんは、13歳の時に沖縄戦を体験し、摩文仁と呼ばれる沖縄戦終結の地で命を得た人です。吉嶺さんは「あのときの教育が悪かった」「戦争をするとみんなが被害者。戦争をするとみんなが狂ってしまう」「みなさんは絶対に悲惨な戦争をしないで平和な世の中をつくってください」と語ってくださいました。戦争は悲惨で残酷です。世界中から戦争や犯罪をゼロにすることは難しいかも知れないけど、僕たちが戦争に「参加しない」ことで、1つでも減らしていけたら、誰もが安心してくらせる社会に近づいていくと思いました。

平和祈念資料館で「平和の礎」を見学後、「糸数ガマ」に行きました。ガマというのは、自然の鍾乳洞の洞窟で、戦争のときは隠れたり、負傷兵を治療したりする病院として使われていました。ひめゆり学徒隊の少女たちも、ここで汗や血にまみれながら治療の補助をしていました。実際にガマに入ると、とても暗く、上から水滴が落ちてきて、なんだか不気味でした。天井に突き刺さったドラム缶の破片などを見て爆弾の強さはすさまじいものだったとわかりました。ガマの中で懐中電灯を消すと、1センチ先も全く見えない暗闇になり、パニックになりそうでした。そこで先生に、「両隣の人と手をつないでごらん」と言われました。探り探りで隣の子の手を握ると、それだけでホッとした気持ちが広がり、仲間の存在をありがたく感じました。僕もとなりの子に「安心感」を与える人になっているのかなと思いました。その当時の重症患者は、真っ暗なガマの中でちゃんとした治療もされずに、孤独に亡くなっていったかと思うと、心が痛いです。

修学旅行2日目、佐喜眞美術館に行きました。この美術館は米軍普天間基地の横にあり、米軍基地から一部取り戻した土地に建てられたものです。今でも美術館の屋上から基地をながめることが出来ます。この佐喜眞美術館では、「沖縄戦の図」の解説を聞かせていただきました。沖縄戦の一番ひどいところが描かれています。この絵には手や足が描かれています。戦場で人の形の残った死体はほとんどなく、肉片になってしまっていたそうです。そしてこの絵には

詩がついていて、あまりにも残酷な様子を伝えています。集団自決とは集団で自ら命を絶つということです。戦争中は大切な人同士でも殺しあわなければいけない状況もあったのでしょうか。今では考えられないことだけど、当時は自決するように教えられていたので沢山の方がなくなっただとも言われています。大切な人や家族を自らの手で殺すのは本当に辛かったと思います。

僕たちは、この修学旅行に向けて、たくさんのビデオや音楽、2年生のときに調べて冊子にした「沖縄調べ」を使いながら事前学習をおこない、沖縄の歴史・文化・人々の思い・戦争について考えてきました。三重県で初めて沖縄修学旅行に行った柘植中学校のドキュメント番組「命どう宝」を観て、自分たちの修学旅行での目的などを確認し、4月の授業参観では、「NEWS ZERO」でモデルの知花くららさんが、祖父の体験した沖縄戦について聴き取っている映像を観ました。アメリカ軍が上陸してきて姉と今まさに自決しようとしているときに、おばさんの声かけで正気に戻り死なずにすんだことや、そのときに死んでいたら孫のくららさんもいなかったと話す映像を、参観に来てくれた家族とともに観た後、ガマでたむける千羽鶴を親子で折りました。その授業参観の感想として、Aのお母さんからこんな話が寄せられました。「この子のひいじいちゃんが沖縄戦で亡くなってるんです。よかったら、平和の礎に刻まれたひいじいちゃんの名を見せてやってください」

「平和の礎」とは、世界の恒久平和を願い、国籍や軍人・民間人の区別なく、沖縄戦で亡くなったすべての人々の名前を刻んだ記念碑で、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を記念して一九九五年6月23日「沖縄慰霊の日」に建設されました。膨大な土地に20万人を超える人の名前が彫られた石碑があります。当日お話を聞かせて下さった吉嶺さんが、Aのひいじいちゃんの戦争当時の状況や、その名が刻まれた場所を調べてくださっていたので、全員でその名を「平和の礎」の中に確認し、手をあわすことができました。僕たちは、ひいじいちゃんたちが戦争に関わらざるをえなかったことや、過去の歴史の勉強が初めて今につながったと実感したこと、そして自分へ命をつないでくれた事実を、とても複雑な気持ちで受け止めながら目をとじて冥福を祈りました。今回の修学旅行では、戦争の悲惨な状況を学ぶ中で、今の世の中の平和のありがたみをすごく感じました。もしかするとこの頃に戦争がなかったらこんな平和な世の中ではなく、今も戦争をしていたのかもしれないかもしれません。そう考えると、今の平和は私たちだけのものではなく、祖先の人たちが辛い思いをしてつくってくれたんだなあと思えてきます。若い私たちこそ今の平和を守っていかないといけないと思いました。沖縄には今も戦争の傷跡や不発弾、米軍基地などが残っています。沖縄戦で生きたくても生きられなかった人たちの分も、自分の命を大切にしたいです。

1日目の食事のあと、サプライズがありました。先生方が内緒で4月の家庭訪問の時に、私たちの家族に手紙を依頼していて、一人ひとりに宛てた家族からの手紙を沖縄に持ってきてくれたのです。みんなはどんな手紙をもらってどんなことを感じたのか、少し紹介してもらいましょう。

私がもらったお母さんからの手紙に「仕事が忙しくて、帰ってくるのが遅いけど、仕事を一生懸命頑張ることで、頑張ることの大切さを伝えられたらな」と書いてありました。今まで、寂しいこともあったけど、お母さんがこんなことを思って仕事をしていたなんて、初めて知り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、この夏休みになってからも、毎日手紙をくれます。その内容には、「人生に一回は必死に勉強しやなあかんときがある。それが今やから必死に頑張ってね。自

分が納得するまでやっごらん」と書いてくれていました。私はお母さんの思いを感じて、これから、どんなことでも一生懸命頑張っていこうと思います。

母からの手紙には、今、私が悩んでいることへのメッセージが書いてありました。「毎日の生活の中で、勉強に部活に宿題に…『もう、いやや、できひん』って思うことがあるよね。そういう時は1回深呼吸するねん。いろんなことをする中であせったらあかんよ。そしたら今あたりまえにしていることが幸せって思えたりするから。長い人生楽しいことも、もちろん悲しいこともある、でもまた笑える。どうにかなるって。今は今しかできないこと…友だちとおしゃべりをする、遊ぶ、勉強する、部活する、疲れたら休む。それでいいねんで」と。私は三年生になり、受験生ということのプレッシャーをすごく感じる時がありました。「テスト前など勉強がいやになる、けどやらなければいけない、やりたくない」そんな葛藤をする私の姿を一番近くでみてくれていたお母さんの言葉に心が熱くなり、また気持ちが少し楽になりました。家族の大切さをあらためて実感した瞬間でした。

母からの手紙から、「看護師になりたいという将来の夢を応援してくれていること」と、「将来に向けてしっかり歩いてほしい」という思いを強く感じました。日頃は、お母さん自身も「しんどいなあ」って言っていて、それでも、いつも私たち兄弟のために頑張ってくれていることをちゃんと知っています。普段は恥ずかしくて言えないけど、おかあさん、いつもありがとう。私はこれから真剣に勉強して、自分の夢に向かって頑張っていきます。

家族からの手紙を読むのは恥ずかしかったけど読み出すと涙が出てきました。吉嶺さんから戦争のことを聞き、ガマへ行ったその日だったからこそ家族や命の大切さをより深く感じることができました。

僕は母からの手紙でひとつ印象に残っている言葉があります。「人によい影響を与えられる人間になってほしい」この言葉の意味は、ポジティブに振る舞い周りを良い方向に導ける人、具体的に、どんな苦しいことや辛いことがあっても、笑顔で周りを明るくできる、そして、人のために積極的に動けるような人になってほしいという意味です。僕は普段もう無理だと諦めてネガティブな考え方になってしまう時があります。しかし、その苦しいときや辛いときこそ笑顔で返せば相手も安心し、いい気持ちになれます。

この手紙を通して、人を思い人のために行動できる素晴らしさを学びました。これから僕は、まず、自分からポジティブに振る舞い、周りを明るくできるような人になりたいです。

母からの手紙を開いたとき、自分の子どもへの手紙なのに、下書きしてくれた跡がわかって、もうそれだけで泣きそうになりました。他の子も涙をうかべながら読んでましたが、特に同じテーブルで読んでいたCは号泣していたので、みんなでそのわけを聞いてみました。

母の手紙にはこんなことが書いてありました。なかなか出来なくて、待つて待つてやっとできた子が僕で、でも出産のときに、逆子で生きるか死ぬかの状態だったので、家族で「どうか助けて下さい」と祈り続けてくれたそうです。このことは手紙をもらうまで知らなかったことなので、とても驚きました。

今では誰からも親しく名前を呼ばれている姿をみて嬉しいし、サッカーもみんなに支えられて頑張っても書かれていました。また、これは手紙ではありませんが、ふだんでもこういう会話があります。僕が阿山中の入学式のために、入学生の手紙として「東日本大震災のことから、今、自分が生きてる環境をありがたいと思って頑張る」ということを言ったとき、すごく誇らしく思ったよと言ってきています。そういうふうに、僕が少しずつ成長していく姿

を見守り、支えてくれていることが、とてもありがたいと思いました。そんなに思ってくれているのかと思うと、号泣してしまいました。今回、母と手紙のやりとりをして、サッカーでも駅伝でもなんでも応援してくれているので、一生懸命何事にも頑張りたいと思いました。それが今、自分にできる親への恩返しだと思います。

僕は手紙を読んだとき、どれだけお母さんが僕のことをおもってくれているかの深さが伝わってきました。家族のことを思って必死で働いてくれるのに、僕は「ありがとう」の言葉が言えませんでした。お母さんは「いつもいっぱいガマンさせてごめんね」と手紙に書いてあったけど、僕は少しもガマンしていないし、逆に幸せやし、「ほっといてよ」と反抗したことが恥ずかしいです。この家族に生まれてよかったと返事を書きました。この機会に、言えなかった「ありがとう」を言えてよかったです。

僕のおかんは一人で3人の子どもを育てています。沖縄は初めて家族で行った思い出の場所です。僕にとっての2回目の沖縄の1泊目の夜に、おかんからの手紙をもらいました。おかんは「あんたはやんちゃやけど、優しい子に育てくれたので、そのままの自分で大人になってほしい」と書いてありました。僕は確かに、今までとてもやんちゃをしていました。ある事前学習の日、沖縄出身のかりゆし58の「アンマー」という曲を聴きました。この曲は、「ボーカルの人が母に送った手紙」といっていいぐらいの曲でした。この人も小さいときに喧嘩や悪さを繰り返していたそうです。僕も痛いぐらい、その気持ちがわかるので、気がついたら歌詞を覚えてしまっていました。この歌を聞いておかんの気持ちがよくわかりました。みなさんもきっと自分の家族や思いと重なるところがあると思うので、僕たちが大好きなこの歌、かりゆし58の「アンマー」を一緒に聴いてみてください。

私たちは家族からの手紙を読んだあと、それぞれが普段言えなかった気持ちを手紙に書きました。手紙だと、意外と素直に書けました。母の顔を見て今まで直接は言えていない感謝の気持ちを書くことができました。ちょっと照れくさかったけど、修学旅行を楽しんでいる報告も添え、シーサーの切手を貼って沖縄から手紙を出しました。「今、学校へ行ける」「何も気にせずに寝られる」などあたりまえの生活は、実は当たり前ではなくて、すごく幸せなことなんだということを感じています。家族からのメッセージを読んで、今まで知らなかった家族の一面も知ることができ、「家族っていいな」とあらためて思うことができました。この経験と学習を通して、「家族と共にいる」「命の心配をしなくていい」あたりまえの毎日の生活のありがたさに気づくことができました。手紙にあった願いや思いを心に残して、家や学校での生活を今まで以上にしっかりとし、もっとよい学年・学校にしていきたいです。これで阿山中学校3年生の沖縄修学旅行の報告を終わります。